

朝鮮大邱高等普通學校	教諭	○多木孝
長野縣立諏訪中學	教諭	○山崎秋成
栃木縣栃木高女	教諭	○有安助二
岡山縣私立與讓館中學	教師	○岡野賢三
		鳥山新四郎

関連事項

① 三浦光風辞任と牙彫部廃止

彫刻科は明治四十年六月以降塑造、木彫、牙彫の三部制をとり、牙彫部は教授石川光明と雇三浦光風（本名柳三郎）が指導にあたっていた。大正二年に光明が死去した後は光風が後任となり、同七年十一月に助教教授に任命されたが、翌八年一月には辞職（同年歿）し、後任の採用は無く、牙彫部は事実上廃止（制度上は同十二年）となった。その間、大正五年に卒業生一人、同七年に中退者三人、同八年に卒業生二人、中退者三名があったのみである。なお、牙彫部最後の卒業生であった故後藤藤清一氏（明治二十六年〜昭和五十九年）の談話によれば、氏は牙彫修業の後に大正四年に東京美術学校に入学したが、二年後には牙彫教育はとり止めとなり、木彫部に編入されて高村光雲の指導を受けたという。

② 日本創作版画協会

大正八年一月十五日から二十日まで三越呉服店で日本創作版画協会第一回展が開催された。同会は前年六月に山本鼎、寺崎武男、織田一磨、戸張孤雁、竹腰健造らが結成した団体で、その趣旨は、西

洋の美術展覧会には必ずエッチングや木版画の作品が出るのに対して日本では非常に優れた版画の伝統があるにも拘らず、文展は版画を排斥し、東京美術学校も製版科がありながら写真製版やコロタイプ等工業的製版を専らとしており、版画の奨励策は全く講じられていないので、自画、自刻、自摺の趣味ある創作版画を発表して世人の注意を喚起しようということにあった。第一回展の出品者は上記五人の外に石井鶴三、小泉癸巳男、萬鉄五郎、永瀬義郎、広島晃甫、逸見亨、前川千帆、喜多武四郎、バーナード・リーチ、M・マニング、恩地孝四郎、藤森静雄、故田中恭吉、故香山藤祿らで、木版画が過半数を占めた。展覧会が大きな反響を呼び、成功をおさめたため、同会は以後毎年展覧会を開くこととし、官設展に版画部門を設けること、東京美術学校に版画科を設置すること、創作版画の普及と版画家出現を促すこと、教習所を設立することなどを目標（『日本創作版画協会第七回展覧会目録』昭和二年）に活動を始めた。その結果、大正十五年には版画も帝展に出品できるようになった。同会は昭和六年に日本版画協会へと発展するが、その近代版画史上の功績は甚大であったと言える。

ところで、創作版画運動と東京美術学校の関係を考えてみると、上記の第一回展では卒業生の山本鼎（三十九年）、寺崎武男（四十年）、石井鶴三（四十三年）、萬鉄五郎（四十五年）、広島晃甫（同）、藤森静雄（大正五年）や中退生の恩地孝四郎、田中恭吉（大正四年歿）らが活躍しているが、そのうちの最も先輩の山本鼎は、そもそも創作版画運動の発端を作った一人である。彼はすでに卒業の翌年五月には同期の森田恒友および眼病で中退した石井柏亭らと『方寸』を発行し、これ

に詩や俳句、散文、評論などとともに石版、木版、銅版画を掲載した。同誌は明治四十四年七月まで刊行が続き、その間には倉田白羊（三十四年卒）、小杉未醒、平福百穂（三十二年卒）、織田一磨、坂本繁二郎、黒田鵬心らも同人となり、木下奎太郎、高村光太郎（三十五年卒）、北原白秋らの寄稿もあった。木下らと『方寸』同人たちは「パンの会」に合流してそこに新傾向芸術の温床ができる。

山本鼎は『方寸』終刊後の明治四十五年七月にフランスへ自費留学し、苦学しながらエコール・デ・ボザールに学び、また、ヨーロッパ各地を旅行するなどして大正五年末にロシア経由で帰国した。留学中の消息は『山本鼎の手紙』（山越脩蔵著。昭和四十六年。上田市教育委員会）所収の肉親宛て書簡によって凡そ知ることができ、が、本学芸術資料館にはまだ一般に知られていないものが一通あるので、ここに紹介しておきたい。

拜啓 陳者春暖の候に際し御起居御爽快の事と拝察仕候 小生儀は東京美術学校の三十九年度西洋画科撰科卒業生に候処平素御無音仕りながら此度唐突に児嶋虎次郎をへて願上候農商務省練習生の件に就き早速御承諾下され候由児嶋より書面を得御厚情の程悉く存候 小生の企望は美術的の製版及び印刷の研学に之有佛国にてローフォルト、リトグラフ、シニールボア等の創作的製版を修め、獨逸にて複製的腐蝕版及び一般の印刷を視察する豫望に御座候 日本には従来画家、彫版家、刷版家各専門の美術的工人は多く之有候へども其三つの知識を具有して適意に運用する製作家は之なくそれがため之を高くしては近代に美術的版画乏しく之を卑

くしては適物を適材に附する事を誤る事夥しく腐蝕版に附すべきものを彫刻により凸版を用ゆべきものを平版に製しなどするため三色刷りにてすむものを五度刷りにしても及ばぬといふ様なる例は最も多く候 丁度小生は少年の頃より彫蝕^蝕數種の製版に従事し近年画をも学ひ候故更に廣く学びて將來の日本に如上の缺を充す可く自任して渡歐し来りし次第に候が美術学校在学中も學業の暇に木版の刀を執りて自營の資を求めし様の貧生とて長期の留學覚束なく候ため甚だ卒事ながら平生の御無沙汰をかへり見ず校長の御後援を仰ぎし次第に御座候 小生は昨年八月巴里に着し十一月エコールドボザールのローフォルト科に入りムツシユワルネルの教室に学ひ居り候 又別にシニールボアの版画家ムツシユシニミットのアトリエに通ひ申候 其処にてはビュランの刀によつて報酬を得つゝいろ／＼のヨーロッパの式を見學致居候 児嶋よりの書面に願書を差し出す可しとの注意之有右に就ては友人倉田白羊ニすべてを依頼仕り候へば白羊參上致す可何卒宜しく御指示の程願上候 不束ながら右申上迄 匆々頓首

大正二年四月四日 巴里にて

14. cité Falguier Paris France

山本鼎拜

正木直彦殿

『方寸』が呼び起こした創作版画勃興の気運は、『白樺』（四十三年四月創刊）による版画家の紹介と泰西版画展開催（四十四年一月）、フェウザン会展（大正元年十月）や『仮面』主催洋画展（同二年秋）における創作版画の出品、デア・シュトルム木版画展（同三年春）、『月

『映』(同年秋)などによって徐々に高まった。デア・シュトルム木版画展はドイツのシュトルム社主催、国民美術協会協賛によるもので、ここには新婦朝の山田耕筲と斎藤佳蔵(大正二年卒)が齎したドイツ表現派系を主体とする版画が展示された。これに強い刺激を受けた東京美術学校西洋画科生徒恩地孝四郎、藤森静雄、日本画科生徒田中恭吉が発行したのが『月映』である。この創作版画と詩の同人雑誌は発行部数のごくわずかで、しかも田中の病死により大正四年十一月に第七号で終ってしまったが、その主観的、独創的木版画は印象深いものであり、また、恩地、藤森という二人の版画家の出発点となったという意味でも特筆に値する。

次いで大正五年には長谷川潔、永瀬義郎、広島晃甫らが日本版画倶楽部第一回展を開き、また、前述のように山本鼎が帰国し、翌六年二月には国民美術協会展において西洋の影響を受けた日本の版画三百余点が展示され、併せて橋口五葉(三十八年卒)の木版画沿革に関する講演と合田清(東京美術学校仏語囑託教師)の西洋木版に関する講演、石井柏亭編『西洋の影響を受けたる日本版画』の発行、西洋名家のエッチングの展示があった。以上のような動きが日本創作版画協会として結実するのであり、その間に東京美術学校の卒業生や生徒は大きな役割を果たしたのであるが、学校自体は版画教育の開始には消極的で、漸く「臨時版画教室」が設けられたのは昭和十年になってからであった。

③ 寺崎広業の辞職、死去

日本画科主任教授にして東京の日本画壇を代表する寺崎広業は大



寺崎広業

正六年夏ころより健康を損ね、同七年十一月に辞職した。その推薦により文展審査委員には広業の後任として結城素明が選ばれ、また、松岡映丘が教授に昇格した(大正七年

十月二日付正木直彦宛寺崎広業書簡。本学芸術資料館蔵)。広業の本校辞職に際し、日本画科卒業生、在校生たちは方鼎式塗金銅印(香取秀真作)を贈り、職員一同は銀印二顆(大島如雲作)を贈ったが、それからもなく大正八年二月二十一日に広業は五十四歳の若さで喉頭癌のため死去した。

広業は日本、中国絵画を広く研究して新味ある日本画を描くことにつとめ、岡倉寛三、正木直彦の信任を得、本校教授として、また文展作家として目覚ましい活躍を続けた。「大仏開眼」(第一回文展)、「溪四題」(第三回文展)等が代表作とされる。正木直彦は『回顧七十年』に「寺崎広業」の一項を設けて「大仏開眼」制作当時の模様を詳しく書いているが、その為人についても次のように記している。

「私は寺崎君程八面鋒の畫家は無い、と思つてゐた。他の人とは仕入方〔込力〕が違ふので、間口が廣く奥行が深く、袋の中から取り出すやうに何でも遺れる。しかも自分は、常陸笠間の城主の後である、と云ふて居つた位で、氣位が高く、規模の大きいところがあ